



2011年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、固定的な性別役割分業観にとられないジェンダーフリーの視点にたつて、男女共同参画社会の実現に寄与するための活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とします。

書類提出期間：2011年10月3日(月)～2011年10月26日(水) 17:00まで
 書類提出先：学生部学生厚生課奨学金係・新座キャンパス事務部学生課・独立研究科事務室
 採用発表：11月24日(木) 学生部学生厚生課奨学金掲示板、新座キャンパス奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板(10号館通路)に掲示予定
 授与式：11月下旬(予定)

(A) ジェンダーフォーラム『年報』掲載論文奨励金

対象：学部学生・大学院学生（個人・団体）
 支給額：優秀：10万円、佳作：5万円
 採用件数：1～4件
 選考方法：論文審査
 提出書類：①掲載論文奨励金申込書* ②論文（日本語2万字以内の未発表論文）
 備考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。

(B) 活動・研究奨励金

対象：学部学生・大学院学生（個人・団体）
 支給額：総額20万円
 採用件数：1～2件
 選考方法：書類審査・面接
 提出書類：①活動・研究奨励金願書* ②奨学金使途を含む活動・研究計画書（A4用紙3枚程度 書式自由）
 面接日時：2011年11月17日(木)、18:00～を予定。個々の面接時間はあらかじめ連絡する。
 面接会場：立教大学池袋キャンパス、ミッチェル館1F ジェンダーフォーラム
 備考：採用者（団体）は活動・研究の中間報告を翌年3月末に提出の上、最終的な報告書または論文を11月末に提出すること。提出の活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）・（B）の申込書（願書）の利用目的】
 標記の申込書（願書）で取得した個人情報は、奨学金採用者（団体）の選考および発表のために利用する。採用者（団体）の論文・報告書等は『年報』に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。以上に同意した上で、申込書（願書）を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、ジェンダーフォーラムのホームページ（<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>）を参照すること。

※ 詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
 （ジェンダーフォーラム事務局 Tel: 03-3985-2307 E-mail: gender@rikkyo.ac.jp）

*申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課窓口、新座キャンパス事務部学生課、独立研究科事務室窓口にあります。
 ホームページ上からもダウンロードできます。（<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>）



立教大学ジェンダーフォーラム

開室日：毎週月曜日～金曜日
 開室時間：10:00～16:00(月火木金) 13:00～18:00(水)
 場所：立教大学池袋キャンパス ミッチェル館1階
 TEL&FAX: 03-3985-2307
 E-mail: gender@rikkyo.ac.jp
 URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPでご覧ください。

案内図



Gemとは…光り輝く宝石。
 Gender Encountering at Mitchell
 を表します。「ミッチェル館での
 ジェンダーの出会い」の意です。

2011年度公開講演会（2011年7月5日）

大学におけるハラスメントをなくすために

講師：戒能 民江 氏（お茶の水女子大学客員教授）

今回の公開講演会は、ジェンダー法学・家族法をご専門とされ、女性の人権問題の第一人者でおられる、戒能民江先生をお迎えして行われた。「大学におけるハラスメント」という包括的なテーマが示すとおり、ハラスメント問題全般に関する非常にわかりやすい講演であったので、簡単に講演の概要をご紹介させていただきます。

【ハラスメントの定義】

セクシュアル・ハラスメントは、男女雇用機会均等法（「職場での性的言動による不利益、就業環境の悪化」）、文科省規程（「相手を不快にさせる性的言動」と、それらによる「就労・就学上の環境侵害、不利益」）等による法的定義がある。他方、近年問題化しているアカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメントは法的定義がない。多くの大学は包括的な規程によって対応しており、例としては、東京大学アカデミック・ハラスメント防止宣言（「教育研究上の権力の濫用による不適切・不当な言動」）がある。

【判断の基準と対応の難しさ】

判断基準は「相手が望まない言動」「上下関係、優位な立場の利用・濫用」「組織の問題」等であるが、概念があいまいで主観が絡むため判断が難しく、当事者にハラスメントの認識がないと、問題解決につながりにくい。また、対応によっては、組織内に対立構造を持ち込み、職場環境が悪化する場合もある。

【ハラスメント対策の現状】

殆どの大学がセクシュアル・ハラスメント防止制度を設けているにもかかわらず、問題は多発しており、ハラスメントの常態化とも言える状況になっている。アカデミック・ハラスメントに関してはハラスメントと指導の境界があいまいで、対応が難しい。大学の対応をめぐって紛争化するケースも増加している。

【大学がハラスメント問題に取り組む意味】

被害者の権利回復と、学習・研究・就労環境の改善のため。深刻なハラスメントは、個人の心身の健康に影響を与え、大学本来の機能にも悪影響を及ぼしてしまう。

以上のような説明に加えて、戒能先生の豊富な経験に基づき、具体的なケースが数多く紹介された。さて、「ハラスメントをなくすために」どうしたらよいか? であるが、残念ながら即効性のある方策は見当たらない。戒能先生によると、ハラスメント防止の王道は防止教育を行うことだそうである。具体的には、学生・教職員を巻き込んだ研修会を開催し、取り組みについての情報公開を行う、といった方法が紹介された。前提として、大学がハラスメント対策に理解を示すことが重要であることは言うまでもない。戒能先生ご自身も、このような講演会活動の継続こそが、ハラスメントを少しでも減らしていくためには必要であることを、身をもって示されているように思われた。

牛嶋 享子（ジェンダーフォーラム運営委員/本学職員）



～ジェンダーフォーラム提案の全カリ授業紹介～

【2011年度全カリ総合B科目】

「クィアとは何か？」

後期木曜5限・池袋キャンパス・MB01教室（マキムホール地下1階）

授業概要・ねらい

本講は、ジェンダーやセクシュアリティの現実を根本的に問い直すために模索されてきた人間のあり方である「クィア queer」とは何かを、様々な角度と実践から明らかにすることを目的とする。「クィア」とは本来、「性的逸脱者」と見なされる人々を侮蔑的に呼ぶ言葉として、19世紀終盤から使われてきた。日本語でいえば、「変態」に近い意味をもつその言葉で「逸脱者」とされてきたのは、主に同性愛者たちであった。

しかし1990年代、そのような侮蔑語を、新たな人間のあり方を体現するポジティブな姿勢に与えられた呼称として、さらには肯定的なアイデンティティとして転用し、自己表現の武器とし始める人々の運動が現れた。それはつまり、強固な性の「規範」から逸脱している人々の立場を、逆に強みとして考える運動であった。逸脱しているからこそ、あらゆる規範に対して批判的であり得ると考えるのである。

本講では、「クィア」というこのようなあり方が、とりわけ先端的に論じられている分野を代表する第一線の講師陣を迎え、毎回特定の理論や実践についての意義を考察していく。それを踏まえ、我々が日々目にする「性差別」や「性暴力」という社会問題に抵抗するための知的基盤を養うことを、授業の究極のねらいとする。

授業計画（4月初発表時より、担当者に変更が生じた）

1. オリエンテーション、授業主旨の説明、講師紹介【新田啓子・黒岩裕市】
2. 現代思想とクィア概念【中村美亜】
3. 表現芸術とセクシュアリティ【中村美亜】
4. キリスト教と性【堀江有里】
5. 異性愛文化におけるレスビアニズム【堀江有里】
6. 性と法学【綾部六郎】
7. 性暴力批判への知的基盤【綾部六郎】
8. 異性愛規範と制度【新田啓子・黒岩裕市】
9. クィア理論とフェミニズム【清水晶子】
10. 性的自己表現とクィア批評【清水晶子】
11. クィア理論から見る自由・平等・正義【新田啓子・黒岩裕市】



本講では、2010年度よりシリーズ的に、ジェンダー、セクシュアリティの理論を実践的に学ぶための場を提供しています。今年も法学・芸術学・思想哲学・文学・社会運動の分野で著名な専門家を招聘し、授業を行います。

各主題を主に担当する講師は上記の通りですが、毎回3人の講師が出席し、対談を行いながら受講者の質問に答えるなど、大教室でも可能な限りの双方向性を目指しています。クィアという新しい概念に親しみながら、実りある対話が生まれることに期待しています！

コーディネーター・新田 啓子（ジェンダーフォーラム所長／本学文学部教授）

リレーコラム

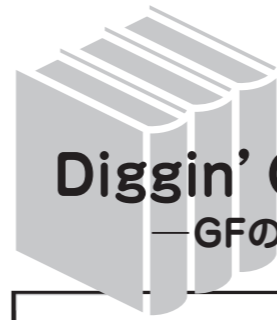
2010年4月、ジェンダーフォーラムの運営委員を引き受けるにあたり「ジェンダーについて全く理解していないし考えたこともない私が、運営委員などできるのだろうか」という不安と悩みがしばらく私から離れなかった。「セクハラ・パワハラ・アカハラ…」いろいろなハラスメントがあるが、私はこれらの問題を考える場がジェンダーフォーラムだと思いこんでいたのだ！そのことだけがジェンダーではないということは、運営委員として関わり始めた時点ですぐに理解できた。そして私の不安はジェンダーについて語る言葉を持っていなかったことだ、と気がついた。それくらい素人だった私も、なんとか運営委員をやらせていただいている。

私の職場であるキャリアセンターでは、学生のキャリア発達を支援・サポートし、学生一人ひとりが卒業後の長い人生の進路を自身で選択できるよう、さまざまな支援業務を行っている。進路選択や就職状況について、立教大学ならではの状況や課題もある。支援業務のひとつである学生相談では、納得しがたい採用現場の実情や、ジェンダーに関わる問題を聞くことも多い。「私は一般職で就職したいです」「私は男女関係ない職場で仕事したいです」「女性の総合職は男性に比べて不利なのですか?」「事務職で残業しなくていい仕事を探したいです」(これには少しびっくりした)。こういった内容は、ジェンダー的視点という見方をすると、さまざま

意見や議論があるだろう。しかし、相談の場面でこのような質問があったとき、この学生に対してどんな返答をすればよいか？この学生にはどう応えるか？常に考えさせられる。…正解があるわけではない。だからこそ私は、彼・彼女たちが何を理由にこの選択を希望しているのか、どんな根拠があるのか、どの部分に不安を持っているのか、根気強く学生の話を書くことにしている。その学生の「らしさ」を見つけて認めることを心がけている。だからといって、就職や進路に関する彼ら・彼女らの悩みが解決するわけではない。これが実に難しいことだなあと、日々実感している。

仕事をするうえで、どんな問題も様々な切り口で考えること、調べること、正しい情報を得ること、自分自身の考えを持つことが大切だとあらためて思う。「ジェンダー」も同じかもしれない。正解を探すことや、善と悪を決めることなく、常識や概念にとらわれず語り合い、考え、その問題の背景や根拠を知る。相手を尊重すると同時に、自分自身の在り方を考える。そのようなことを理解するまでに1年半も経ってしまった。ジェンダーという言葉についていまだはっきりした自分の言葉は持たず、ふわふわとあいまいなままであるが、今後も私らしくジェンダーフォーラムと関わっていきたい。

吉村 母都美（ジェンダーフォーラム運営委員/本学職員）



Diggin' Out — GFの書架から

母性のゆくえ「よき母」はどう語られるか

エリザベート・バダンテール著／松永りえ訳、春秋社、2011年 評者：矢島 毅昌

エリザベート・バダンテールは、1980年の著書『L'Amour en plus』（直訳すると「付加された愛情」）*において、社会史研究の手法により母性本能の自明性を問い直した。それから30年を経て、「自然」の名のもとに母性本能への回帰がみられる今、あらためて母性を問い直すのが本書である。

避妊ピルの解禁や人工妊娠中絶の合法化によって、1970年代末にフランスの女性たちは妊娠・出産をコントロールする手段を手に入れた。それは、女性が母親になることを宿命や自然の摂理とする考えに終止符を打ち、女性が一人としての充実を最優先させる意識を生み出したが、他方で、自らの選択で出産した母親には、子どもに対して果たさねばならない義務が大きく課せられることになった（序文～第1章）。

そして、1973年の石油危機をはじめとする数々の経済危機によって復活した「自然主義」のイデオロギーは、かつてのよき母親への回帰を女性に強いる逆風となっている。化学製品を悪の根源とするエコロジーは、避妊ピル、粉ミルクと哺乳瓶、紙おむつを糾弾する。霊長類学・人類学は、「科学的な研究」によってヒトの母性本能を守るための主張を展開する。新世代のフェミニストは、男性との違いを政治的・精神的武器にするため、生物学的に女性に備わる側面を強調する。それぞれが手を結びつつ独自のやり方で、一種の「自然に帰れ」主義を褒めそやす。中でも、「自然」の名のもとに母乳育児を推進する「ラ・レーチェ・リーグ」に対するバダンテールの批判は、世界的機関の政治的な活動の手法を読み解くうえでも興味深い。母乳育児の推進により、哺乳瓶で授乳をする「雌鳥父さん」も激しく攻撃され、再び父親は仕事に打ち込むことが理想とされていく。子どもと二人きりの世界を続けることを理想とする生活モデルは、そんな生活を望んでいない女性や、専業主婦でいられる金銭的余裕のない女性には、大きな重圧となる（第2章～第4章）。

だが、「自分磨き」が重要とされる現代は、理想の女性像は母親らしさだけでとどまらない。夫婦・カップル生活や職業的・社会的評価を大切にするために、理想的な母親像との折り合いに悩む女性が増え、子どもを持たないことも選択肢の一つとなった。多くの国々で出生率の低下が問題とされる中、フランスの出生率の高さが注目されている。17～18世紀のフランス上流社会に属する女性にとって、育児は社交界で務めを果たすうえでの特権であった。そうしたスタイルが下層に広まっていた伝統もあって、長い間、子どもの責任を負うのは母親だけではないという考え方も認められていた。フランス人の母親は自然や道徳に反していると評判が悪いが、昔から徹底して変化のない「悪い母親像」こそがフランスの出生率の高さを説明するものだと、バダンテールは主張する。しかし、この30年間、水面下ではイデオロギー戦争が起こっており、母親の罪悪感という武器を使って母性本能という概念を再びもてはやす「自然主義」への回帰は勢いを増している。この潮流に、バダンテールはあらためて警鐘を鳴らしている（第5章～第7章）。

副題からもわかるように、本書は「これからの母性はかくあるべき」と単純明快に訴えかける本ではなく、錯綜する「よき母」の語り方への見取り図となる本である。「こども手当」など近年の日本に関する言及も各所にみられるものの、基本的にはフランスおよび西欧圏の話題が中心であるが、日本の母性や母親像を考えるうえで示唆に富んだ議論が展開されている。一時メディアを賑わした、仕事も育児も美貌もあきらめない女性や、専業主婦志向に回帰する女性や、育児を楽しむ「イクメン」も、母性や母親像の錯綜を物語る一断面であろう。また、未曾有の震災によって多くの子どもと高齢者が被災したとき、そのケアを担う存在の母性がクローズアップされてはいなかっただろうか。読み手一人ひとりの関心と立場に応じて、具体的な想像が膨らんでいく一冊である。

*同書は1981年に「プラス・ラブ」（サンリオ刊）として出版されたが、筑摩書房より復刊される際、英語版の題名「The Myth of Motherhood」をもとに「母性という神話」と改題して出版された。

（ジェンダーフォーラム事務局／日本大学等非常勤講師）



ジェンダーと授業 — 講義内容(シラバス)を検索してみる —

<http://wwwj.rikkyo.ac.jp/kyomu/>



↑ 本学の学部科目でキーワード「ジェンダー」「gender」を有する検索結果一覧画面の一部

※2001年度より、本文中5大学（本学含む）で開始された単位互換制度。但し紹介した他大学のサイトで検索できる全ての授業を自由に履修できる訳ではない。詳細はf-Campusホームページ（<http://www.f-campus.org/>）

今年度より大学の教育情報の公開が義務化されたのですが、既に立教大学では10年ほど前より講義内容（シラバス）をweb公開していました。左記のサイトでは、本学で開講している全ての科目が一覧できる他、科目名やシラバス本文を対象としたキーワード検索も可能で、検索結果として各科目のシラバス本文も閲覧できます。

それでは2011年度に立教大学で展開される学部科目から、シラバスにキーワード「ジェンダー」または「gender」を含む科目を検索してみましょう。左記サイトにアクセスし、[大学]を選択→検索語フィールドに「ジェンダー」と「gender」を入力→or（いづれかを含む）を選択して[Search]ボタンを押す、という簡略な方法です。結果88科目が該当し、一覧で表示された科目名それぞれがシラバスにリンクされる仕組みです。

同様にシラバスをweb上で検索できる大学は多いですが、一例として本学がf-Campus*において単位互換を行っている大学のシラバス検索サイトを紹介します。

- ◆学習院大学：<http://syllabus.gakushuin.ac.jp/syllabus.html>
- ◆学習院女子大学：<http://gwcsyllabus.gakushuin.ac.jp/>
- ◆日本女子大学：<https://www6.jwu.ac.jp/up/faces/login/Com00501B.jsp>
- ◆早稲田大学：<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm?pLng=jp>
開講されている科目の講義内容のみならず、単に「ジェンダー」というキーワードで検索した結果（科目数等）を比較するだけでも、大学や学部の特色が出て興味深いかも知れません。

原 修（ジェンダーフォーラム運営委員/本学職員）

